

中級漢字教材の開発

—『漢字1000PLUS』の指導法—

加納 千恵子
筑波大学留学生センター

効率的な漢字学習のためには、初級段階から漢字の構成要素に関する体系的な説明をすることが必要であり、実際の使用場面に即した漢字の整理や、字形や意味、読み、用法などによる漢字の仲間づくりが学習に役立つという立場から、初級漢字教材『基本漢字500 Basic Kanji Book』が開発された。本稿では、それに続く中級段階において必要となる学習項目を検討し、非漢字圏のみならず漢字圏学習者にも有用な自律的学習の支援を目指して開発された中級漢字教材『漢字1000PLUS Intermediate Kanji Book』を取り上げる。中級段階における漢字教育の目標は、もはや文字としての漢字の指導であるよりは、むしろ漢字を使った効率的なポキャラリー・ビルディングであると考えられる。教材の構成や取り上げられている学習項目などを紹介しつつ、中級段階の漢字の指導方法について提案する。

1. はじめに

従来の漢字教材は、文法や会話、読みなどを教える目的で作られた主教材に準拠した形が多く、したがって各課の本文から学習すべき漢字および漢字語彙を取り出して、それらに筆順、読み、意味、用例などをつけて教材としたものがほとんどであった。多くの場合、シラバスと呼べるようなものもほとんどなく、教えるべき漢字あるいは漢字語彙の一覧表が示されているにすぎなかったといえる。日本語教育全体においては、「構造シラバス」から「場面シラバス」、「機能シラバス」へと指導、学習の観点が広がってきたが、漢字教育においては依然として学習対象となる漢字の「構造」すらも教えられていない状態が続いていたのである。

加納・他(1988)は、このような「構造」のない漢字教育が、特に非漢字圏学習者にとって如何に大きな負担となっていたかを指摘し、効率的な漢字学習のためには、初級段階において漢字の成り立ちや構造に関する体系的な説明が必要であり、さらに実際の使用場面に即した漢字の整理や、字形や意味、読み、用法などによる漢字の仲間づくりが学習に役立つことを主張した。その結果開発された初級漢字教材が『基本漢字500 Basic Kanji Book』⁽¹⁾である。初級の漢字教育においては、①文字としての漢字の特性(表意性、表音性、表語性や造語性)を理解させることとともに、②複雑怪奇に見える字形にも構造があると気づかせる

こと、③日本語の表記システムの中の漢字の役割（漢字仮名交じり文、送り仮名など）に慣れさせること、などが重要な指導上のポイントとなる。

本稿では、それに続く中級段階において必要となる学習項目を検討し、非漢字圏のみならず漢字圏学習者にも有用な中級の漢字教育を目指して開発された教材『漢字1000PLUS Intermediate Kanji Book』（以下、『IKB』と略す）⁽²⁾について報告し、その指導法を提案する。中級段階における漢字教育の目標は、もはや文字としての漢字の指導であるよりは、むしろ漢字を使った効率的なボキャブラリー・ビルディング（語彙力の拡充）であると思われる。従来の日本語教育では、ボキャブラリー・ビルディングはもっぱら読解教育において行われてきた感がある。しかし、読解教育が「文法」や「語彙」の指導に終始していた時代から、読解教育本来の目的すなわち読解技能の習得を目指すような指導を行う時代になりつつある現在、読解以前のボキャブラリー・ビルディングを担うべきところが、漢字教育であるといえるのではないだろうか。

2. 初級・中級の漢字教育における指導項目

『基本漢字500 Basic Kanji Book』では、初級段階における効率的な漢字学習のために500字を選び、以下のような指導項目を設定している⁽³⁾。

| | |
|---|---|
| ①象形文字・指事文字・会意文字などの字源 | B K 1～7 |
| ②漢字の字形(筆順および画数) | B K 1、2(漢字の書き方) |
| ③漢字の音読みと訓読みの読み分け | B K 2(漢字の話) |
| ④品詞別(形容詞・動詞)漢字の分類 | B K 8、9、17、24、37 |
| ⑤形容詞や動詞の漢字の送り仮名 | B K 8、9 |
| ⑥字義による漢字の分類 (時・家族・位置・行政区分・季節など) | B K 10、15、18、20、26、36 |
| ⑦部首による漢字の分類 | B K 11～14、30 |
| ⑧形声文字の音符(紹介のみ) | B K 14 |
| ⑨漢字の接辞的用法 | B K 19、27、45 |
| ⑩漢字熟語の意味的な構造(語構成) | B K 20、35(復習)、41 |
| ⑪漢字熟語の用法(品詞)による分類 | B K 16、21、38、43 |
| ⑫漢字熟語の意味・使用場面による分類 (専門分野・趣味・結婚・試験・旅行・表示・ 経済・空港・地理・大学・抽象的概念など) | B K 22、23、25、28、29、31、 32、33、34、35、39、40、 42、44 |
| ⑬文脈からの漢字語の読みの類推 | 読み物 → 読解 |
| ⑭文脈からの漢字語の選択 | 書き → ワープロ使用 |

阿久津・他(1992)は、初級の300～500字の学習を終えた外国人学習者の漢字習得状況を評価・診断するための12項目からなる漢字力テストを実施した結果から、非漢字圏学習者と漢字圏学習者の困難点の違いを考察した。

漢字力テストの12項目

| | | |
|----|---|--------------------|
| 意味 | { | 1. 漢字の意味理解 |
| | | 2. 漢字熟語の語構成 |
| 読み | { | 3. 単漢字の読み |
| | | 4. 漢字熟語の読み |
| | | 5. 文脈からの読みの類推 |
| | | 6. 形声文字の音符からの読みの類推 |
| 書き | { | 7. 部首の認識 |
| | | 8. 単漢字の書き |
| | | 9. 漢字熟語の書き |
| | | 10. 文脈からの漢字選択 |
| 用法 | { | 11. 漢字の送り仮名 |
| | | 12. 漢字・漢字熟語の用法(品詞) |

そして、中級段階を始める学習者にとって、できる者とできない者を特徴的に分けている困難点は以下のようなものであるという結論を得ている。

(1) 非漢字圏の学習者に特徴的な困難点

- できない者にとっては、すべての項目 (1～12)
- ◎できる者にとっては、漢字の書き (8、9)

(2) 漢字圏の学習者に特徴的な困難点

- できない者にとっては、送り仮名 (11)、漢字・漢字熟語の用法 (12)
- ◎できる者にとっては、字音語の読み (4、5：音の長短、清濁、促音)

(3) 非漢字圏・漢字圏に共通する困難点

- ◎できる者にとっても、形声文字の音符からの読みの類推 (6)

漢字学習がうまくいっていない非漢字圏学習者にとっては漢字に関するすべての項目が難しいことはいうまでもないが、意味の理解(1、2)に関しては、読んだり書いたり困難なレベルであっても、できている場合が多い。しかし、かなりできる非漢字圏学習者にとっても漢字の「書き」が弱い点は特徴的である。

それに対して漢字圏学習者の場合は、全く日本語の漢字を学習していなくても意味の理解はできており、その有利さは明白であるが、体系的な学習をしておこなった者には漢字語の品詞や送り仮名の間違いが特徴的に見られる。また、かなりできる学習者であっても、字音語の読みなどに間違いが残る傾向がある。漢字圏の中でも韓国の学習者は、「書き」が弱いという非漢字圏の特徴をも合わせて持っている。

さらに、非漢字圏にも漢字圏にも共通して形声文字の音符の知識が欠如していることは、初級段階の指導において漢字が表意・表語文字であることを強調するあまり、漢字の表音性を軽く扱いすぎている結果と見ることもできよう。中級段

階以降、漢字熟語の中でも字音語のボキャブラリー・ビルディングが重要になってくることを考えると、形声文字の音符の指導はかなり有効な学習項目になると考えられる⁽⁴⁾。

加納(1994)では、初級を終わった段階での漢字力テストの結果などから、以下の10項目を中級の漢字教育における指導項目として設定している。(『I K B』の該当課を右に付記した。)

| | |
|-----------------------|-------------|
| ①漢字の整理・分類法の復習 | L 1 |
| ②漢字熟語の品詞、用法 | L 3、L 4、L 7 |
| ③形声文字の音符を使った字音語の読みの類推 | 復習 1、復習 2 |
| ④漢字の音訓の読み分け | L 8 |
| ⑤漢字熟語の語義の分解・語構成 | L 6 |
| ⑥漢字の接辞的用法 | L 6 |
| ⑦反義の漢字と反意語 | L 2 |
| ⑧類義の漢字と類義語 | L 1 0 |
| ⑨同音の漢字と同音語 | L 5、L 9 |
| ⑩日本語の漢字音の構造的特徴 | L 8 |

3. 『Intermediate Kanji Book』の構成と指導法

『I K B』Vol. 1は、初級での学習項目を復習・整理しながら、中級レベルで必要な漢字力を養成するために、次のような対象と目標を想定して開発された。

対 象： 初級漢字300～500字程度の習得を終えた漢字圏、非漢字圏の学習者。(ひらがな、かたかなの読み書きはもちろん、初級文法の習得も終わっているものとする。)

目 標：①中級の漢字語彙のボキャブラリー・ビルディング

②初級を終えた学習者の困難点の克服

③学習者の自律的漢字学習を支援する

目標①は、漢字を手がかりに、中級レベルの読解でいろいろな分野に共通して使用頻度の高い語彙を拡充し、その正しい用法を身につけさせることである。②は、漢字圏の学習者の場合は、とくに字音語の読みに弱いという困難点を、形声文字の音符からの読みの類推や日本語の漢字音の特徴を知ることなどによって克

服し、正確な読みの力をつけることを意味している。また、非漢字圏学習者の場合は、漢字に関するさまざまな知識を補充しながら、正確な書きの力をつけることである。③は、漢字圏・非漢字圏の学習者が漢字のさまざまな記憶法、整理法、練習法を試しながら、最終的には自分に最適のものを選んで、自律的に漢字学習を続けられるようにすることである。

『IKB』の構成とねらいは、以下のようになっている。

- | | | | |
|------|----------|---|--|
| 第1課 | 漢字の仲間 | = | 初級漢字の復習をしながら、漢字の字義、字形、字音、用法などによる整理・分類法を紹介する。 |
| 第2課 | 反対語の漢字 | = | 反義の漢字の知識を利用して、反対の意味をもつ語彙や対になる語彙を拡充しながら、それらの用法にも注意させる。 |
| 第3課 | 漢語の動詞(1) | = | 「する」をつけて動詞として使える漢字語彙を拡充しながら、和語と漢語の意味分担にも気づかせる。 |
| 第4課 | 漢語の形容詞 | = | 「な」をつけて形容詞として使える漢字語彙を拡充しながら、それらの用法にも注意させる。 |
| 第5課 | 同音の漢字 | = | 同音の語彙を拡充しながら、アクセントの違いにも注意させる。 |
| 復習1 | 形声文字(1) | = | 形声文字の音符の知識を増やすことによって、未習漢字の読みを類推する力をつける。 |
| 第6課 | 漢語の語構成 | = | 中級で使用頻度の高い、接辞的用法のある漢字の用法を学習させながら、漢字熟語の語義の分解・語構成についても復習させる。 |
| 第7課 | 漢語の動詞(2) | = | 「する」をつけて動詞として使える漢字語彙を拡充しながら、類義の漢字熟語の使い分けにも注意させる。 |
| 第8課 | 漢字の音訓 | = | 複数の音読み、訓読みのある漢字を取り上げ、それらの読み分けを練習しながら、日本語の漢字音の構造的特徴にも気づかせる。 |
| 第9課 | 同訓の漢字 | = | 同じ訓読みをもつ漢字語の使い分けを練習する。 |
| 第10課 | 類義語の漢字 | = | 類義の漢字を手がかりに、類義の漢字語彙を拡充し、その使い分けにも注意させる。 |
| 復習2 | 形声文字(2) | = | 形声文字の音符の知識を増やすことによって、未習漢字の読みを類推する力をつける。 |

『IKB』の各課は、それぞれ次のような構成になっている。

- 復習 →自習 (解答付き)
- 基本練習 →自習／授業 (巻末に解答あり)
- 要点 →自習／授業
- 応用練習 →授業 (巻末に解答あり)
- ◎課題 →宿題、後に授業で確認 (解答なし)

「復習」の問題は、原則として既習漢字（初級の漢字500字に前の課の学習漢字を加えた範囲）のみで作られており、直後に解答もつけてあるので、学習者が自習によってその課のねらいを知ることができる。

「基本練習」は、「要点」に書かれている説明を読むことによって学習者にも自習が可能な、比較的やさしい練習問題になっている。ただし、さらに授業で確認する時間がとれれば、まだ漢字力が弱い学習者には学習法のよいガイダンスになると思われる。漢字力のある学習者には、「要点」を読んでもわからなかった箇所についてのみ、授業で質問を受けるなどの方法もある。

授業では、「応用練習」をいっしょにやりながら、その課のポイントを確認したり、いろいろな練習方法について話し合ったりすることができる。『IKB』の「基本練習」「応用練習」には、できるだけ多くの形式の練習問題を載せるようにしているので、その課にある練習をするばかりでなく、前の課にあった練習の形式に作り換えてやってみるとか、いろいろな工夫をするように指導することが大切である。

「課題」は、宿題として学習者にやってこさせるものである。中級段階の漢字教育では、教師が教えるばかりでなく、学習者自身が周りにいる日本人や辞書や新聞などの情報源を活用して、漢字に関する知識を得ることが可能であることを知らせる必要がある。「課題」にはいわゆる正解というものはない場合が多いので、授業で各学習者が集めてきたデータや課題の結果について報告させたり、それらを集める過程や問題点などについて話し合わせたりすることで、授業が活発にできる。

4. おわりに

中級レベルの漢字指導をより効率的にするためには、まず学習者一人一人の漢字学習のバックグラウンドが異なっていること、すなわち既習漢字の数や種類、学習方法などに違いがあることを考慮する必要がある。学習者自身のニーズや志向によって指導法の向き不向きや好き嫌いが生じる場合もある。教師はできるだけ多様な学習方法や練習方法のサンプルを示して、その中から学習者自身に自分に最も合った方法を選ばせ、各自の困難点を克服するように指導していく必要がある。

あるのではないだろうか。

また、漢字を学習することによって効率的に漢語語彙を増やしていくことは、中・上級の日本語読解力や作文力の向上に不可欠であるばかりでなく、抽象的な内容の話を聴いたり話したりする際にも重要になることを学習者に自覚させる必要もある。漢字を手がかりにしたボキャブラリー・ビルディングこそ、中級レベルの漢字教育の大きな目標であろう。

さらに、漢字の習得には長時間の学習の継続が必要であり、授業での指導だけでそのすべてをまかなうことは到底できない。空いている時間に学習者が教師以外の自分の周囲にいる日本人や辞書などを情報源としてうまく使って、自律的に漢字学習が進められるような、オープンエンドな課題の設定の仕方も重要である。教師はこのような課題を学習者にやってこさせ、その結果を授業中に発表させるなどすることによって学生同士のディスカッションを促し、学習者がその中からお互いの学習上の問題点を理解したり、その解決方法などについてアドバイスし合ったりできるような雰囲気を作ることが重要である。玉村(1993)は、漢字教育における重要事項の最後に「できれば漢字圏と非漢字圏の2グループに分けて行う方が能率的で効果的だと考えられる」と述べているが、中級段階においてはむしろ両者が混ざっているほうが、学習者が互いの問題点に気づき、自戒したり自信を深めたりすることによってクラスが活性化し、漢字力が伸びるように思われる。特に非漢字圏の学習者にとっては、いつまでも非漢字圏だけのクラスにいるよりも漢字圏といっしょに学習することによる力の伸びが大きいようである。

いずれにしても、漢字学習を長続きさせるためには、初級で行われるような教師主導による半強制的な学習習慣形成のための指導方法から、中級においては、学習者主導による自発的、自律的学習方法へと移行させていくことが必要だろう。今後さらに、学習者の自律的学習を支援するためのいろいろな練習形式を考案していかなければなるまい。また、漢字圏学習者の中には、放っておくと「漢字はできるから改めて学習する必要はない」と思い込んで自発的な努力をしない者も見られるので、授業で漢字圏学習者の困難点を自覚させるような工夫をするだけでなく、それに対する適切な指導法を考えることも今後の課題である。

注

- (1)加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子(1989)『基本漢字500 Basic Kanji Book』Vol.1、Vol.2 凡人社
- (2)加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子・阿久津智(1993)『漢字1000 PLUS Intermediate Kanji Book』Vol.1 凡人社
- (3)「BK」は『Basic Kanji Book』の課を表す。参考文献4.のp.45に学習項目の一覧と学習漢字配当の表がある。
- (4)玉村(1993)も、漢字教育の重要事項として形声文字について指導すべきことを指摘している。

参考文献

1. 阿久津智・清水百合・加納千恵子・谷部弘子・石井恵理子(1992)「中級漢字の指導法 -漢字圏・非漢字圏の学生に対する指導の違いを中心に-」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp. 7-12
2. 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・石井恵理子(1988)「基本漢字の選定」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第3号 pp. 75-93
3. 加納千恵子・清水百合(1992)「漢字力の測定・評価に関する一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第7号 pp. 177-191
4. 加納千恵子(1994)「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第9号 pp. 41-60
5. 玉村文郎(1993)「日本語における漢字 -その特質と教育-」『日本語教育』80号 pp. 1-14

※本研究の一部は、文部省科学研究費補助金による一般研究(B)「パーソナル・コンピュータを利用した外国人学習者の漢字力テスト(CAT)の開発」(研究代表者：加納千恵子、課題番号：04455003)からの助成を受けている。